
異世界の魔王と翼の天使

あるぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の魔王と翼の天使

【Z-コード】

Z8151Z

【作者名】

あるぴよ

【あらすじ】

普通の高校生活を送っていたロキは、魔王として異世界に召還される。いきなり魔王になれと言われても、もちろん、答えはノー。断つたら入れられた牢屋。そこで、光をまとつ天使と出会い。魔王なのに勇者と間違えられつつ、なぜ、自分が魔王なのか。魔王とはなんなのか。ここにいる意味を知るために、いろいろ非常識な、仲間と共に歩み始める。挿絵たっぷりでお送りするつもりです。

魔王になれといわれても

> . 1 1 6 7 2 — 1 2 8 6 <

いつも朝にするように、俺は防寒具を着、高校へ向かっていたはずだ。

見慣れた道を歩いていたら、いきなり脳内をかき混ぜられるかのような気分の悪さを感じた。おとなしく家に戻るうとしたところ、虹色に濁る風景が広がり、氣を失ったのは覚えている。

それから、俺はどうしたんだったか？

状況を把握しようとしながらも、痛む頭をおさえ、田の前に広がる状況を呆然と見ていた。

「魔王サマダ！ 魔王サマの召還セイコウ！」

見るからにグロテスクな生き物たちが俺の周りに集まっている。ゲームとか漫画とかで良くある、魔物や妖怪と呼ばれる物たちとよく似ている。といつても、実際見るのは初めてだが。最新技術に比べようのないぐらい、リアリティがあるそれらは、異臭すら放っている。

ありえない光景だが、すでに夢じゃない事は理解していた。夢と現実の区別が付かないほど、のんびり過ごしてゐるわけじゃない。

それでも、誰でもこう思つだらう、お願ひだからこゝは夢だといつてくれ。」
「こういう生き物は空想の產物、つてのは常識だらう？」

魔物たちの代表だらうか、一歩一歩と、ゴブリンを縦に伸ばしてコウモリの羽を生やした まるでキメラのような不安定な見た目をした、それでもどこか風格のある魔物が近づいてきた。

その魔物は動けない俺を、赤く、ギラギラと光る目で見下すといつ言い放つた。

「世界征服、シロ。オマエ、キョウカラ魔王」

魔王だつて？

これを聞いた時の俺の表情は、きっとはたからみたら面白いぐらいいにだらしない顔をしていただらう。

しかし、魔王に世界征服とくると、人間の敵になるといつ事じやないか。今まで一般人でやつてきた男に、この魔物は何を望んでいるんだ。

断れば魔物に殺されるだらうと分かっていたはずなのに、俺は魔物をにらむと言つていた。

「断る」

人間辞めるつもりも、人間を殺すつももまったく無い。

後から思えば、ここで適当に話をあわせて自分の命を優先していたらよかつたのだろう。

でも、これからのお会いの事を考へると、この言葉を言ったこのときの俺は、何よりも正しかったんだと胸うさだ。

> .111693 — 1286 <

腹に鋭い痛みを感じた後、気が付いたら、どうやら牢屋らしい所に居た。さつきまでは魔王様だとか言っていたのに、この世界では王は牢屋で暮らすものなのかな。

ぐらり、と上半身を起こす。手と足は縄で縛られていって、起き上がるのに苦労してしまった。

「こりは、暗いな。鼻につんとくる臭いに、眉間にしわがよる。固そうな石で乱雑に作られた痛々しい跡のついた壁に、しっかりと作られた鉄の柵が浮いて見えている。

「たなのは日本じゃ考えられない不思議体験だな、と失笑がもれた。

「起きたのですね」

いきなり背後から声をかけられて、我ながら感心するぐらいの反応で振り返った。予想以上に俺は、緊張状態にあつたらしく。ああ、心臓が飛び出たかと思った。ぜつたい寿命が少し縮んだな。どうせ、こりで死ぬ気もするから、たいした事ではなさそうだけど。

> 1 1 6 9 6 — 1 2 8 6 <

振り返ったそこには、光があった。……つてこりのにおかしいな。

白い人　俺と同じ年ぐらいの、中性的な顔立ちに、優しい目をした青年がいた。筋肉があるのか疑つてしまつほど細いシルエットに、全体的に色素が薄いのもあいまつてか、印象はとても静かだ。そして、白い光をまとう姿は、まるで、

「へえ、天使なんて本当に居るんだな」

思わず、感嘆したように呟いていた。

「ああ、つまり、今から死ぬ俺を迎えて着たのか？」

最後が、こんな見知らぬ場所だなんて。大丈夫。どうせ、俺を待っている人は、もう居ない。しかし、俺もとうとうあつちに行くのか。あつさりと感じつつも、未練が無いわけがない。

どうせなら、人生最後に出会う人間は　天使だからカウントされないのかもしないが、女の子が良かつたな。なんて事もよぎりつつ。

そうだよな、どうせ連れて行かれるなら、女の子が良かつた。俺の人生は、彼女居ない暦＝年齢な上に、女性と関わることなんてないに等しい、寂しいもので。最後ぐらい、な……。

「僕は別に、貴方をあの世につれて行くために此処に居るわけではありませんよ」

そろそろ、走馬灯のように思い出が蘇りそうになったところ、「ひそかに、気が抜けしたような声で言われて、自分が取り乱していた事に気が付く。

冷静になると、だんだんと恥ずかしさがこみ上げてきた。

「わ、悪いな……、いきなり事が続きすぎて、混乱してたみたいだ」

恥ずかしさで顔を背けつつ、ちらりと目を向ける。よくよく見れば、相手はただの青年。何で、天使だなんて勘違いしたのか。迎えに来てもうひとつしても、腹が少し痛むだけで、まだ俺は死んでない。

青年はといふと、こちらを見ながら何か考えているようだった。この人頭があかしいとか思っていたるのかもしれないな。……普通だったら涙が出る所だ。俺がうな垂れていると、青年が、にこりと、微笑んだような気配がした。

「僕はツバサです、よろしくお願ひしますね」

「……ん、ああ、俺はロキ。よろしくな

いきなりの自己紹介に驚いたが、何とかあまり慌てずに返すことが出来た。

ツバサ。そう聞いて、まるで「いつが天使になるのに足らない部分を、名前で補つてあるよ」つだな。なんて思った。

でも、男に対しても天使、と思ったのは失礼だよな。俺だって、そう言わても微妙な気持ちになるし。

「そういえば、ロキは、天使が居ないと思つてたのですか？ そういう方にははじめて会いましたよ」

ツバサはすこし首をかしげ、目を細める。優しげな目に、その仕草はよく似合つていた。

ああ、この世界 異世界で間違いないだろ？「こ」では、天使は当たり前に居るものなのか。こちらの常識が無いのに、下手に話すものじゃないな。

「いや、そういうわけじゃないけど」

俺は言葉を濁す。

別に異世界から来たと言つても別に良いんだが、ツバサの事を一度天使と言つてしまつた手前、これ以上に変な事を言つて、変な奴だ、と軽蔑されたら、この牢屋の中で、寂しい思いだけして息絶えるのか、そんなの、たまたまんじやないしな。

それに……異世界から来た＝魔王っていう公式があるかもしれません。しばらくは様子を見ることにしようつか。

「そういうえば、ツバサはなんで牢屋に入れられてるんだ？ 魔王退治に来て返り討ちにでもあつたのか？」

魔王についての知識も得たいので、思いつく質問をしてみる。魔王を倒すといえば勇者だが、別に誰が倒しに来ても別にいいだろ。すると、ツバサはさりに目を細めた。先ほどの優しい目と違い、今度は呆れが見える。返り討ち、と言つた事に怒つたのかと思ったが、違うようだ。

「貴方が魔王でしょう、何言つてるんですか」

しまつた。魔王つて事はばれていたのか。でも、普通は牢屋に入れられてる時点でおかしいと思うだろ……。この世界では王が牢屋で暮らす、っていうのもあながち間違いじゃなかつたのかもな。

どうせならこのまま知りたい事を質問していこうか。向こうも手がつながれていて行動に移せないし、魔王知つても攻撃的な態度を取られていな所を見ると、安心して良いかもしねない。

「何で俺だつて分かつたんだ？」

「さつき会った、ふんぞりかえっていた魔物よりも貴方の方が魔力が多いようなので。あとは、勘ですね」

「へえ、俺にも魔力つてあるんだな。ふんぞりかえる魔物、と聞いて、あのキメラのような見た目の　俺に蹴りを入れた奴を思い出す。おそらくアイツで間違いないだろう。思い返したら、腹が立つてきた。」

「まあ、当たつてるよいで当たつてないな」

俺は一息あいて言ひ。

「魔王つてあれだろ、魔物の王になつて初めて呼ばれるものだ。それなら俺は魔王じゃないな。あのずる賢い顔したアイツが今のところ魔王つて奴だろ」

そう言い切る。これはどっちかといつと、散々な目にあつた不満を込めた、愚痴に近い。

それを分かつたのか、ツバサはくすりと笑い、

「確かに、そういう考え方もありですね」

楽しそうに、やつら言つた。

>.111852 - 1286 <

「さて。こつまでも無駄話してゐ場合ぢやないですね」

気がついたら、ツバサを縛っていたロープは地面の上にだらしなく垂れていた。なんだ、意外にも縄抜けの達人だつたのか。もしかしたらツバサは、良く捕まつてゐるほどの事をしてゐる、つて事で、怪盗だつたりするのだらうか。魔王城には宝物を盗みに來た、とか。

俺のロープも切つて貰つ。窮屈な格好をしていたらか、すゞく開放感があつた。伸びをして、予想以上に固まつていた体をほぐす。やつぱり、ずっと正座もどきの体勢はきつこよな。

「今は、とつとと此処から出で、とんすりするべきです。あの、むかつく顔を一度も殴れず仕舞いなのが悔しいですが」

物騒な言葉が聞こえた気がするが、氣のせことしておいつ。

「これから逃げるつもつらしい事に、俺は気持ちが明るくなつた。まだ、家に帰れる見込みはない上に、外に出でても当たが無いが、こんな所に居るよりかはずつとましだらう。

でも、脱走、できるのか？ 監視が居ない訳ぢやないだらう。武器も無く丸腰で、あんな魔物達に勝てる氣はしない。唯一、こちの世界に一緒に來た荷物も、奪われてしまつた。

「ツバサは、魔物を倒せるのか？」

田の前の青年があれを倒せるよつこはといつてい見えないが、ここは異世界。一いちぢの常識よりもずっと上の戦闘能力をもつてゐるだろうし、魔法もある。それらをもつてすれば……。

だが、見えて来た希望に反して、ツバサは首を横に振つた。

「僕は、攻撃的な魔法が使えません。魔物を倒すには、いたさかしんどいです。つて事で、口キさん。僕の護衛お願いしますね」

いやいや、そんな素敵な微笑でお願いされても、困る。

「悪い、戦つたこと無いんだが」

俺は少し前まで普通の高校生で、魔物なんて見たのは生まれて以来、初めてだつたわけで。もちろん、喧嘩すらしたことが無い。武器と呼ばれる武器も、レプリカを持つたことがあるぐらいだ。

「……魔王なんですし、闇魔法の名前を言えば出るんじゃないですか？ ほら、ダークネス、つて」

ツバサが牢の柵を指差す。

この世界には魔法があると分かっていたが、魔力があると言われたとはいえ、自分に使えるとは思っていなかつた俺は戸惑つた。

小学生の時は友人とふざけて言つてたこともあるが、この歳になつて、技名を叫ぶつて言つるのは恥ずかしいな。

指差した、つて事は壊せということなのだろう。気持ち、手を前にかざしてみる。俺は形から入るタイプなんだ。

「よしひ……『ダークネス』！」

そう唱えたとたん、田の前で闇が爆発した。それは渦を巻きながらブラックホールのように空間を喰い、飲み込む。

あれほど頑丈に構えていた柵の姿は、消えてしまつていた。

「本当に魔法だ……！」

自分の手をまじまじと見つめる。先ほど見た田は変わってないが、確かにここから魔法が出たのだ。一度、いや、何度も願つたことがある、魔法を使ってみたいっていう願いが、今になつて叶うなんて思つていなかつた！

「本当に、出るなんて……びっくりです」

ツバサも驚いたようで、目を丸くしてこちらを見ていた。お前……半信半疑だったのに、言つたのか。もし出なかつたら俺は思いつきり叫んでおいて、不発という凄く恥ずかしい目にあつてたことになる。人間不信になりそうだぞ。

「つて、ばかっ、魔力の使いすぎですよ」

俺が魔法を使つたことにより、上の階が騒がしくなつていた。牢屋から魔力を感じ取り、騒ぎになつてゐるのだろう。魔法つて便利だけど使い方によつて厄介になるんだな。でも、そんな事言つながら、最初から言つてくれたらいいだろう。初めて使つたんだから分かるわけない、俺は悪くないだろ。それに、結果として、牢は空いたんだから問題はなし。

「ほら、脱出するんだろ、敵が集まる前に早く行くぞー。」

俺たちは、牢から出ると一旦散に走つていた。どうせもうばれているんだ、魔力の調整なんて後から覚えればいいだろ。そう思い、壁を突き破れないかと、壁に向かつて魔法を放つたりもしてみた。しかし、その先は土。どうやらここは地下らしい事が分かり、今は

上の階に行くことのできる階段を探している。

走っていて違和感を感じたのだが、相当な距離をマラソンしているにもかかわらず、スポーツをしていないわけではなかつたが、元の世界に居たときよりもあまり疲れを感じない。基礎体力が上がっているらしい。おかげで、魔物が追いかけてきてもスピードを上げて引き離すことが出来た。

そこで気になつたのはツバサだが、息も切れずついてきてる所を見ると、心配は要らないらしい。さすが異世界の住人だ。いや、盗賊だったつけ？

そうやって順調に進んでいたのは良かつたのだが、やはり簡単には外に出してくれないらしい。階段の前には、毛むくじゃらな巨大な体をどしりと揺らしながらこちらを見ている　トロールもどきが居た。

後ろには追いかけてくる奴らがいて、ここで立ち止まつてている暇はないのに。苛立ちと焦りで、ひやりと体が冷えるような感覚がした。

「ロキちゃん、先ほどのよつとお願いしますー」

ツバサに言われ、いざ、相手に対しても手をかざすと、怖くてたまらなかつた。殺氣、というものを始めて知つた。トロールもどきは確かにこちらに敵意を向けている。目をあわすと力を吸い取られるよつで。とても、恐ろしい。

しかし、まずは自分の命だ。本當なら、魔物とはいえ、傷つけるなんて事、したくない。気絶ぐらうにとどめればいいのだが、……。

「……魔物を殺すのが心ぐるしこのですか？」

ツバサが心配な顔で見てくれる。俺の迷いで、巻き込むわけには行かない。

「《ダークネス》……」

「」は、俺の居た日本じゃない。時には人が襲い掛かってくることがあるだろ？「」なんといふで、自分を殺そうとしてくる魔物にさえ恐れていじりするんだ。

魔法で、良かつた。剣で斬りつけるとかじやなくて良かつた。手に感触が残つたり、返り血なんて浴びたら、正氣で居られなかつただろ？から。俺は、魔法に呑み込まれるトロールもどきを、見ないよつこして階段を上つた。

「魔物って言つたつて、生きてるんだと懲りつと、辛い……。けど、やめようとか、甘いことは思わない」

俺だつて、これからもつと力を付けて、牢屋にほり込みやがつた、あこいつのえらそうな顔を一発殴らないと気がすまないしな。魔王な

んだし、経験を積めば、あいつよりも強いはずだ。……たぶん。

「良い心構えです」

階段を上ると、日の光が見えてきた。やよつなら、魔王城。魔王城はやっぱり、始まりの地より終わりの地の方が似合っていると思つよ。

× 11739 — 1286 ×

森、森、崖、洞窟

魔王城の外は、うつそうとした森だった。俺よりも背の高い、見たこともない植物がぎっしりとはびこっている。らしい、といえばらしいが、俺としては、魔王城の周りというのは、生物が住めないところのはずであつて。

「灰色の枯れた崖の上に建つていて、背景はコウモリと雷のイメージなんだがな」

「それだったら、崖を切り崩して城を落とす事が出来て嬉しいのですがけどね」

ついでに雷をなんにも落ちてもらつて、復讐もせりぱり完了です。とツバサがうなづく。やっぱりこいつは天使より、怪盗とか、そういうのがぴつたりだと思つ。「、でも」俺は首だけを、木々に隠されすでに遠くなつた魔王城に向けた。

「視界を遮ってくれるおかげで、敵を撒きやすい。助かったのは確かだな」

「気は抜かないでくださいよ、魔物には獣のように鼻が利くのも多いはずですか……、ほら、来たようです」

草が擦れあつ音に混じり聞こえてきたのは、獣の唸り声。（……

先手必勝つ）魔物が居るだらう方向に魔法を撃つ。

「キャインッ」

小さく獣が鳴く。無事に魔法が当たった事にほっとする。が、それが隙となつてしまつた。青色に輝く、三本に分かれた巨大な尾を持つ狼が、真横の茂みから飛び出してくる。（しまつ、た）慌てて移動したおかげで、辛うじて腕を引っかかれただけで難を逃れたが、もしあの牙に、噛みつかれていたら。

「墮ちゆつ……『ダークネス』！」

狼は、俺の撃つた魔法に吸い込まれるようにして、消えた。この魔法、相手を傷つけ弱らせるとかじゃなく、闇に吸い込むらしい。どこに行くのか、気になるが、確かめるわけにもいかない。だが、近距離で使える、自分まで巻き込んでしまうのだろう。

「ロキさんは、攻撃する時に田をつぶすぞです。危ないですよ

ツバサが、辺りを見渡し、もう魔物が居ない事を確認すると、こちから歩いてくる。

そうは言われても、生きていたものが死ぬ所は見てて気分が良い訳ないじゃないか。たとえ、それが虫でも、何でも。死骸なんて見

たくない。もしかして、この気持ちが魔法の性質に影響しているのか？「、う」どうも、先ほど狼に噛まれた傷が痛む。菌が入つたら困るが、あいにく俺は救急セットを持ち歩くような、まめな性格じゃない。

「ツバサ、消毒できるものとか、持つて無いか？」

「……怪我したなら早く言つてくださいよ」ツバサは、一つため息をする。「今のところ、貴方に死なれると困りますので」

素直じゃないな。と言いたい所だが、実際それが本音だろう。魔王城から出たとはいえ、先ほどのように強力な魔物が出る場所で、俺しか戦えないなのだから。

「見せてください、治癒魔法をかけます」

ツバサは腕まくりをし、気合いを入れ直した。

傷を治せるなんて、便利な物もあるんだな。異世界の良さをやつと知れた気がする。まあ、こっちにこない限りこんな怪我もすることなかつたんだけど。だいたい、向こうじや、最後に怪我という怪我を負ったのは、やんちゃしてた小学生以降、滅多にした事ない。

「どうかツバサ、魔法、使えるんじやないか。

「僕は、攻撃的な魔法が使えないって言つただけですよ。……魔力

があまり無いので、他の魔法も、一日一回が精一杯ですが

聞いたげな顔に、気づいたのか、ツバサが答える。へえ、魔法つて、使える限界とかあるのか。俺の魔法はどれぐらいなんだろ。魔力は多いみたいだから、大丈夫なのだろうか。これが使えなくなつたら、すごく困るんだけれど。治癒魔法が、他の魔法よりも消費が大きいとかであつて欲しい。

「便利かどうか分からないな」

「いみじきです、魔力ばか」

「痛ツ」

ツバサは、乱暴に俺の腕を引っ張ると、手を添える。おいおい、怪我してるつて分かつているんだろうか。激痛とまではいかないが、結構深いその傷は、ずきずきと、痛む。飼い犬に引っかかれても、これぐらい痛いのだろうか。可愛い顔して、犬つて怖いのかもしない。元の世界に戻つたら、気をつけよつ。

「《世界よ。彼の者の時の流れを変化させる事を許可する。治れ、『ヒーリング』》」

ふわり、と森の風のように優しく、春の太陽のような暖かな光が辺りを包んだ。電球やLEDの光でも、ホタルの光でもない、は

じめて見る光。痛みは、傷は、あつといつ間に消えていた。

「ツバサの魔法って優しいんだな

発言は優しくないけれど。そう付け足しそうなのを呑み込みつつ。「はあ、」ツバサは腕からこちらに視線を移すと、奇妙な物を見るようにした。

「俺が始めて体験した魔法ってのは、魔物が使う、頭がガンガンぐらぐらする物だったからさ」

「なるほど、災難でしたね。闇の魔法っていうのは攻撃特化ですか、仕方がありますよ、命を落とさなかっただけましです」

「冗談にならないから、怖いよな。さて、その危ない魔法を食らわないうちに、逃げないとな。

「いつたい、この森、どこまで続くんだ

早く、人間の居る所に行きたい。まあ、魔王城の近くに村とかあるとは思えないが。そもそも、お腹もすいてきた訳で。テレビで見るのすら、いくつか道具が用意されているつていうのに、こんな、何もなしからスタートのサバイバル生活なんてまっぴらごめんだ。

「僕は知らないんですけど、魔王の貴方なら知ってるんじゃないですか？」

「う、そう言われると困るな。しかし、お前はいつたい、どこから入ってきたんだよ。そう聞きたかったが、せつかく俺が牢屋に入つてた事や、不審な点を深く聞かないで居てくれてるのに、申し訳ない気がして、やめておいた。

不意に、ツバサが立ち止まり、上を見上げる。それにならうと、高くそびえ立つ、岩の断面が見えた。

「困りましたね、崖、です」

「しまつたな、行き止まりか。……ん？」

「、どうしました？」

崖の、一部が緑色に光っている。異様に思い、近寄つて調べてみる。と、光っていた岩一面が、ガラガラと崩れ落ちた。先には、空間が広がっている。どうやら洞窟らしい。

「いい、結界が張られていたんですね」

「つまり、何か重要なものがあるって事か」

「もししくは、出口ですね！」

嬉しそうに、洞窟に進んでいくツバサに続いて、中に入った。こうじつ、じめじめして暗い所は、すごく、ものすごく嫌いなんだがな。「ウモリや、虫が、出ないよう祈った。

けれど、ああ、まずは魔物が出ないよう、って願うのが先だつたな。

「ふふ、こじが見つけられたのは褒めてやるが、残念だつたな。唯一の出口なのに、守りが弱いと思つてたら大間違いだ。魔法のエキスパートの俺様が居れば、貴様ラなんて、いちこ口だかうな」

洞窟の先には、「ウモリや虫は居なかつたが、緑色の光の放つ、ぐにぐにと動く、ゼリー状のよくしゃべる物体が居た。そう、冒険の最初、お馴染みの経験稼ぎ。雑魚モンスター。

「おお、スライムだ」

「ぐふ……っ」

俺が名前を口こじたとたん、スライムがハンマーで殴られたかのようじ、その場に倒れこんだ（んだと思つ）。やれやれ、ツツコミの代わりに、こけるつて表現は、漫画ではもう使われない、古いリ

アクションだぞ。

「何故貴様ラみたいな人間が、我の弱点が、スライムと言つ呪いの言葉で呼ばレル事だと知つていルのだ！」

ぴくぴくと動くそれは、地面に張り付き、盛大に独り言を語つて
いる。

「コイツの弱点とか知つてゐわけなかつたが、正直、名前を呼ばれるだけで瀕死になるなんて「弱ツ」つて思つたりとか、いつたいどこから出てきたんだつて考えたりだとかしたことは言葉にならなかつた。

「残念ながら、口キせん、声に出てますよ」

「き、貴様ラ……！」コケにしゃがつて！このスライム様が、た
だで死ぬと思つくなよ！」

不敵な笑みを浮かべると　雰囲気がそんな感じだつただけで、
顔はないのだが　スライムは、叫んだ。

「呪いをかけてやル！」

何かぶつぶつと囁え始めるやうなや、現れたのは呪いといつ言葉

通りまとわり付くような、どろりとした黒い煙。あわてて口をふさぐが、すでに入り込んだのか、肺や器官に感じる違和感に、むせ返つた。

「これで、貴様ラは一生不幸だ。はは……ははは……！」

光となつて消え行く悪魔の断末魔が洞窟に反響し、俺達はその光に飲み込まれるように、その場から消えた。

> i 1 2 0 7 2 — 1 2 8 6 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151n/>

異世界の魔王と翼の天使

2010年10月9日01時17分発行